

みゆき駅 落とし物係 高田 智子

「次はみゆき駅、みゆき駅、終点です」
 車掌さんの声で、ゆみは目を覚ましました。
 日曜の昼下がりに、ひとりピアノのレッスン
 にかけて帰りのことです。ふと前の座席を
 みると、茶色いケースが置いてあります。ま
 わりに人はいません。それは日ざしをあびて
 居眠りしているうさぎのようでした。
 (きつとだれかの忘れものだ)
 ゆみはとっさにケースを抱えると、電車を
 飛び降りました。改札で駅員さんにそのこと
 を話すと、駅員さんは言いました。
 「そこに落とし物係があるから、持って行っ
 てくれるかな」
 「これはバイオリンだね」
 受け取った係の人は言いました。じつさい
 係の人がふたを開けると、つやつやと光る楽
 器が顔をのぞかせました。まだ新品のよう
 す。
 「すみません、それ、わたしのです」

そこへ息を切らせて、女の子がかけこんで
 きました。ゆみと同年くらい、髪をおさ
 げにした女の子です。
 「さっき、電車のなかに忘れたんです」
 バイオリンに手を伸ばしかけた女の子に、
 係の人は聞きました。
 「あなたのお名前は？」
 「上野かなです」
 「こまったなあ」
 係の人はバイオリンとケースを確かめなが
 ら言いました。
 「どこにも名前が書いてないや」
 となりて見ていたゆみは、いらいらしてき
 ました。まるでいじわるを言っているよう
 す。すると、係の人は言いました。
 「うたがっているわけではないよ。ただ、こ
 れが本来にあなたのものだと分からないと返
 すことはできないんだ。そういう人がたまに
 いるんだよ。おさいふを落としてもいないの
 に、落とししたとうそをついて、ここにやっ

くる人が」
 そのとき、ゆみはいいことを思いつきまし
 た。
 「ここでバイオリンを弾いてもらったらどう
 ですか。もし弾けたら、これは彼女のもので
 す」
 かなでは、バイオリンをケースから取り出
 し、弓を慣れた手つきで構えました。それは
 彼女のからだの一部のようになじんでいまし
 た。かなではひとつ深呼吸をすると、すべり
 だすように演奏を始めました。軽やかなメロ
 デイイです。さっきまでしかめつらだった
 係の人も、曲に合わせて肩を揺らせています
 曲が終わる頃には、バイオリンの持ち主は、
 かなでこそふさわしいと、みんなが思いまし
 た。
 あれから十年たちました。みゆき駅のピア
 ノで、ゆみの伴奏に合わせて、かなではバイ
 オリンを弾いています。